
遊戯王 ~ とある高校生の日常的で非日常的な生活 ~

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

【Nコード】

N7862Z

【作者名】

露

【あらすじ】

冬休み最終日、その高校生は母親に買い物を頼まれた。その帰り道、彼は謎の男と出会い、デュエルすることになる。そしてそのときから、彼の日常は大きく変わろうとしていた……。

遊戯王を織り交ぜた学園物だと思ってくれれば幸いです。

プロローグ く始まりはいつも唐突に……く（前書き）

初めまして。今日からこちらでも小説を書くことにしました。時期が時期なので結構不安だったりしますが……。後、不安だといえ赤ちゃんと完結出来るかどうか、ですね。

まず、この話を読むに当たって注意事項を。

- ・この話はアニメの再編物語ではありません。
 - ・主人公の使用デッキは不特定です。
 - ・基本、チートドローだったりじゃなかったりとか。
 - ・この話のデュエルディスクは基本的にはアニメ、遊戯王ZEXA Lの遊馬が使っているようなものです。
 - ・更新は不特定です。
 - ・一話一話が基本短いです。
 - ・自作オリカなんてありません。
- 以上、ですかね。

では、どうぞ。

プロローグ く始まりはいつも唐突に……く

それは、突然のことだった……。

「私と、デュエルして下さい……。」

そいつとあったのはホント余りにも突然のことだった。

「お前は誰だ？ 俺は訳の分からん奴とデュエルするつもりはない」
確か俺は母さんに買い物を頼まれて……、今はその帰りの途中のはずだ。それに昼間だから辺りはまだ明るい。

「フフツ、貴方はまだ自分のおかれた状況が分かってないようですねえ」

は？ どういうことだ？

「辺りを見てみたらどうです？」

謎の男が何言ってるのか俺にはよく分からんが、辺りを見てみると、明るかった空が黒い。というか、何かに包まれてる感じがだ。

「漸く目が馴れてきたようですねえ」

今まであいつのことしか見てなかったから気づかなかったのか……。

「これは……、お前がやったのか？」

「そうとも言えますし、そうじゃないとも言えます」

「意味不明……」

「因みに、素直にデュエルしてくれれば何も起きやしません」

「……受けないとしたら？」

「さあ？ そのときは私にも分かりません」

逃げ道なし、か。

「いいだろう、お望み通りデュエルしてやる」

「フフツ、私にとっては嬉しい限りです」

全く、敬語が不気味な野郎だぜ……。

そして、この掛け声で俺達のデュエルが始まった。

「デュエル！」

そして、数ターンと30分が経過した頃……。

「リビングデッドの呼び声を発動、墓地のスクラップ・ドラゴンを蘇生。カードを一枚を伏せ、スクラップ・ドラゴンの効果発動、今伏せたカードとお前の伏せカードを破壊。そしてお前にダイレクトアタックして終わりだ！」

よし、勝った！ これで解放される。

「クツクツク……」

「何だ、何がおかしい？ 俺はデュエルに勝ったんだ。早く解放しろ」

「おや、これは失敬。やはり貴方がスクラップ・ドラゴンの使い手でしたか……」

やはり？ どういうことだ？ それに、スクラップ・ドラゴンはレア度の高いカードだが、使っている人は結構いるぞ？

「おい、どういうことだ？ ちゃんと説明しろ！」

「時期に分かることです。然し、ここでの事は忘れてもらったほうが今後の都合にとってもいいことでしょう」

膝をついていた男が立ち上がって両手を広げる。

「何をやる気だ！？」

「また会うことを楽しみにしてますよ」

俺の意識が朦朧としていく中、あいつはそう言って消えていった。クソ、まだ聞きたいことがあるのに体が動こうとしねえ。

そして俺は、完全に意識を手放してしまった……。

ブログ 始まりはいつも唐突に…… (後書き)

次は近いうちに投稿したいと思います。

では、感想やアドバイスをよろしくお願いします。

T U R N 1 〱 全ての始まりは日常から〱 (前書き)

少し早めに投稿できました。

それでは第1話、どうぞ！

TURN 1 く全ての始まりは日常からく

目を覚ますとそこは見慣れている白い天井、俺の部屋だった。眠っていたのか、俺は……。

「やっと起きたんだ」

頭を覚醒させると聞き慣れた女性の声が出た。体を起こし、その声の主のほうを見る。そこにはセミロングの茶髪の俺の妹、北条真波ほつじょうまなみが椅子に座って心配そうな表情で俺を見ていた。

「おはよう、龍一」

「おはようって……、今何時だよ」

俺の名前は北条龍一ほつじょうりゅういち。近くの私立高校に通っている一年生だ。

それよりも、外は暗いのおはようって……、何の冗談だよ。

「7時半だよ」

「7時半って……、もう夜中じゃねえか」

というか、いつから俺は寝てたんだ？ 確か、母さんに買い物を頼まれて、それで……。

「そんなことより龍一が道端で倒れている、て聞いたときは私もお母さんも吃驚したよー！」

「え、倒れていた？ 俺が？」

はて、そんなことあったっけな……？

「買い物から終わった後に倒れてたんだよ？ 幸い、何も取られてなかったからよかったものの……。私達、本気で心配したんだよ！」

「そうか……。悪かったな……」

磨波はそれ以上何も言わない。その顔を見てるだけで俺を心配してくれてるのはよく分かる。

「……もうすぐご飯だから、早く支度しなさいよ？」

彼女はそれだけ言っただけで俺の部屋からでていった。

しかし、色々疑問がある。まず、買い物に行ったこと、これは覚えている。問題はその後だ。買い物したデパートからここまでではそんなに離れていない。だが、帰り道のことを覚えていない。俺は襲われたのか？ それにしちゃ何も取られてないのは不自然だし、第一痛みを感じない。疲労で倒れたにしちゃ寝てた時間が短いし……。

「……わかんねえもんは分かんねえか」

俺はそう納得させて部屋を出て一階に降りた。

* * *

俺は今食事しているのだが、どうもさっきから考え事にばかり頭が行って箸が進んでない。

「龍一、大丈夫？」

その声をかけるのは俺の母、北条真由美ほしじょうまゆみだ。俺の通ってる高校の教師をしている。

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだ」

「本当に？ きょうも道端で倒れたんだから早めに寝るのよ？ 明日からは学校でしょ？」

「わあってるよ」

つたく、心配してくれんのはいいけど過保護なんだよな、俺の母さん。

「大丈夫だよ、お母さん。龍一は平気だって。それよりも後でデュエルしよう！」

「はいはい」

真波は元気だよな、ホント。

その後、夕飯が終わって片付けをした後、俺達は庭に出てきた。全く、冬の夜はホント冷え込む……。。

そして、デュエルディスクを腕に装着すると俺達は構えた。

「じゃあいくよ、龍一！」

「ああ！」

「デュエル！」

TURN 1 〽全ての始まりは日常から〽 (後書き)

次回からデュエルが出来そうです。

では、感想やアドバイスをお願いします。

TURN 2 へ飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴンへ！ (前書き)

デュエルに当たってのこの小説のルールは以外の通りです。

・ライフポイントは4000でスタート。それ以外はOCGRルールです。

・制限、禁止リストは最新のものを使います。

大まかなところは以上です。

では、どうぞ。

TURN 2 へ飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴンへ

龍一	L I F F E	4 0 0 0
真波	L I F F E	4 0 0 0

「じゃあ行くぞ。俺のターン！」

さて、真波とのデュエルが始まったわけだ。デッキからカードをドロ―し、それと手札を確認する。うん、結構いいほうだ。

「召喚僧 サモンプリーストを召喚。効果により守備表示に変更。そしてサモンプリーストの効果発動。スクラップ・エリアを手札から墓地に送ってデッキからスクラップ・ビーストを特殊召喚」

初期手札にしちゃ結構いいほうだ。俺の目の前にはソリッド・ヴィジョンとして2体のモンスターが現れる。このデッキの要の一つであるビーストがこうやって出せたのは最初の段階では嬉しい。

召喚僧	サモンプリースト	D E F	1 6 0 0
スクラップ・ビースト	A T K	1 6 0 0	

「あちゃー、そのデッキか……。しかもその布陣だと……」

真波は呆れている。この状態はよく見るからこの後の展開も予想出来るだろうな。

「まあな。俺はレベル4のサモンプリーストにレベル4のビーストをチューニング、シンク口召喚！ 飛翔せよ！ スターダスト・ド

ラゴン！」

サモンプリーストが4つの光となり、ビーストが4つの輪となって光を包む。その後、一段と輝きが1つになり強くなると俺はエクストラデッキから1枚のカードをディスクにセットした。そしてフィールド上にはその名の通り星屑の煌きを体に纏った美しい龍が舞い降りた。

「いつ見ても綺麗だけど、やっぱりそいつかー!!」

真波は叫ぶ。それは嫌だ、という感じに。効果が時々厄介なんだよな、こいつ。レベルの割に打点が低いが、ノーコストに近い破壊無効効果がある。だから主力モンスターはこの攻撃力2500を越えるかどうか鍵になったりする。

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

フィールド上に裏側のカードが現れる。そしてフィールドのスターダストを見る。あれ、今こっちを向いてた？

龍一 LIFE 4000

「私のターン、ドロー！」

真波は勢いよくカードを引き抜く。元気なことだ。

「私は光の援軍を発動！」

あいつは今引いたカードを見せる。というか、それを引いたのか。俺とのデュエルだと大抵最初の手札にあるんだよな、あれ。すごい引きだと思う。

「デッキトップ3枚を墓地に送ってデッキからライトロード・サモナー ルミナスを手札に加えるよ。そして、ソーラー・エクステンジを発動！ ウォルフをコストに2枚ドローしデッキトップ2枚を墓地へ。もう1枚のソーラー・エクステンジを発動してジェインをコストに2枚ドローしてデッキトップ2枚を墓地に」

うわー、すごい勢いで回ってるよ、あのデッキ。最初の援軍でライヤンとガロスとオネストが、エクステンジ2枚でライラとブラック・ホールとエイリンとサイクロンが落ちた。だが、墓地にはライトロードモンスターが6種類。あいつのデッキは純粋なライトロード。この状況だと……。

「裁きの龍を召喚！」

やっぱりきたか、あいつの切り札。流石、としか言えないな。

裁きの龍 ATK 3000

「伏せカードが怖いけどここは臆せず攻める！ バトル、裁きの龍でスターダストに攻撃！ ライトニング・ストライク！」

スターダストがいるから効果を使わなかったか。そして、真波の呼びかけに答えて裁きの龍が口から光線を放つ。だが、その光線が細くなりその龍も小さくなった。

裁きの龍 ATK 1500

「何で攻撃力が半分に!?!」

「そりゃ、収縮を発動させたからな」

俺のフィールドのカードが1枚オープンされる。それは速攻魔法だった。

「それを伏せてたの!?!」

「意外か? スターダストで迎撃、響け! シューティング・ソニック!」

俺の呼びかけに答えてスターダストが口からかなり速い衝撃波を出して裁きの龍を破壊した。

「あちゃあ……。メイン2でモンスターをセットしてカードを1枚伏せてターンエンド!」

真波 L I F E 3 0 0 0

「俺のターン!」

さて、モンスターはいいとしてあの伏せカードが怖いな……。誘ってみるか。

「スクラップ・ビーストを召喚!」

フィールドにまた機械化された獣が現れる。

「そのときトラップ発動！ 奈落の落とし穴！」

やっぱりか……。

「速攻魔法、スクラップ・スコールを発動。ビーストを選択」

「それもあつたの!？」

真波は驚いているがそこまでか？ 誘ってみた俺も俺だけ……。
相変わらずひっかかり易いなあ……。

TURN2 へ飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴンへ（後書き）

取り敢えず、最初のデュエル前半は終了。後半は近いうちにできると思います。

では、感想やアドバイス、間違いの指摘をお願いします。

T U R N 3 く刺され！ 禁じられた聖槍！く (前書き)

前回の後編です。

TURN 3 へ刺され！ 禁じられた聖槍！

龍一	L I F F E	4 0 0 0
真波	L I F F E	3 0 0 0

「効果は分かっているな？ デッキからスクラップ・キマイラを墓地に送ってシャッフル、その後ドロウしてビーストを破壊する」

「奈落の落とし穴は無意味になる、と」

「そゆこと。スクラップ・スコールで破壊されたビーストの効果発動。墓地からキマイラを手札に加える」

真波は相当落胆している。そうだろうな、自分のかけた罠に引っかからなかったからな。

「バトル。スターダストでセットモンスターを攻撃、響け！ シュールディング・ソニック！」

一通りの処理を終えると俺は攻撃に移る。そしてスターダストに攻撃を指示すると彼は口から衝撃波を横向きの裏側のカードに放つ。そのカードは表側になると小さな犬が現れ、破壊された。

「セットモンスターはライトロード・ハンター ライコウ。デッキトップ3枚を墓地に送るよ」

「破壊しないのか？」

「スターダストで無効にする気でしように……」

真波が苦笑して言う。まあよく使う効果だからな。

「じゃ、カードを1枚伏せてターンエンド」

龍一 L I F F E 4 0 0 0

「私のターン！」

さて、ここからあいつはどう動く？

「私は手札抹殺を発動！」

マジかよ！？ そのカードはかなりキツイぞ。しかも来たカードはそこまで良くない……。

「裁きの龍を特殊召喚！ そして効果を発動！」

え、あいつは何をする気だ？

「スターダストの効果発動！ ヴイクテム・サンクチュアリ！」

スターダストは一つ咆哮すると光を拡散させ裁きの龍を包み、消えていく。それは、裁きの龍も同じだが……。

「3体目の裁きの龍を特殊召喚！」

何っ！？ あいつはなんつー引きしてるんだ！？ それは流石に予想出来なかつたぞ！

「裁きの龍の効果発動！ このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する！」

「くっ！ 速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！」

裁きの龍が光を放つと同時に俺のカードが開いてそこから出た槍が裁きの龍に刺さった。痛くないのか？ いや、呻き声あげてやがる。

裁きの龍 ATK 2200

「あちゃあ……。私はライトロード・マジシャン ライラを召喚してバトル！ ライラと裁きの龍でダイレクトアタック！ ライトニング・ストライク！」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 1700

マズい！フィールドがガラ空きになった以上、直接受けなきゃいけない！

「ぐう……」

ここまでギリギリまで追い詰められるとやはりキツイものがあるな……。

「エンドフェイズにデッキトップを7枚送ってターンエンド」

「そのとき、スターダスト・ドラゴンは舞い戻る！ 再び飛翔せよ！」

裁きの龍 ATK 3000

龍一 LIFE 100

真波 LIFE 1000

さて、スターダストがフィールドに戻ってきたはいいんだが、手札がブラック・ホールにスクラップ・スコール、強制脱出装置じゃ難しい。次のドローが問題だな。

「俺のターン、ドロー！」

俺は引いたカードを確認する。これは……！

「このまま終わらせる。バトル！ スターダストでライラに攻撃！
響け、シューティング・ソニック！」

「え、終わらせるってどういうこと!?!」

まあ、あいつが驚くのも無理ないな。このままだとライフは2000残るからな。

「2枚目の禁じられた聖槍をライラに発動！」

「……………え？」

ライトロード・マジシャン ライラ ATK 900

同じ槍が今度はライラに刺さる。あいつも痛そうだな。しかもお腹
つて…………。そしてスターダストの衝撃波が当たる。何か申し訳ない
な…………。

真波のライフが0になり俺の勝ちが表示されると、モンスター達が消えていった。そのとき、スターダストが俺を見てたようだ……。気のせいだよな？

「……振り回されっぱなしだった」

「まあ、そういつデッキだからな」

負けて啞然とし座り込んでいた真波が最初に言ったのはそれだった。あながち間違いないからな。

「じゃ、俺は風呂入って寝るよ。少し早いけど明日から学校だもんな」

「あ、そっか」

そして俺達は家に戻っていく。まだ10時だが、昼間のこともあるしな。

「そつだ。真波、ちゃんと勉強しとけよ？」

「大丈夫よ。貴方の高校ぐらいなら合格は簡単だから」

「あ、そつ」

今の会話の通り、真波は中学3年生の受験生だ。見た目は可愛いのは分かるが人の心配をそう返さないでほしいなあ。ま、こいつは優等生だから大丈夫だろうけど……。

TURN 3 く刺され！ 禁じられた聖槍！く（後書き）

取り敢えず、最初のデュエルは終了となります。如何でしたか？

では、感想やアドバイス、間違いの指摘があると嬉しいです。お願いします。

TURN 5 〱 精霊 現る！〱 (前書き)

今回の話は前の話の次の日のことです。デュエルはなしです。

では、さようねー！

TURN 5 〱 精霊 現る！〱

「じゃあ龍一、また後でね！」

「ああ。走るのはいいが、道に気をつけるよ？」

「大丈夫大丈夫！」

俺達は今、学校に行く途中。真波とは途中まで通学路が一緒だからよくこうして歩いている。で、その分かれ道の大通りまで来た。

「さて、と……」

真波を見送った後、俺は振り返る。そこにも、否、どこを見渡しても学生やサラリーマンの姿ばかりだが俺達の来た道を見る。

「いい加減出てきたらどうだ？ 家からずっとついて来られて少し不愉快なんだよ……」

少し大きな声で言ったからか周りの人が驚いてこっちを見ているが俺は気にしない。少しすると周りもまた動き出して俺のことを気にしない。

そして突然光が一点に集中して龍の形、そしてよく知っているモンスター……に？

「……え？」

そう、よく見知ったモンスター、俺の非常に気にいったドラゴンのシンクロモンスターの2体のうちの1体、

「スターダスト……ドラゴン？」

そう、スターダスト・ドラゴンが現れた。

「こうして会うのは初めまして、になるな、北条龍一」

「俺を……知っているのか？」

* * *

「じゃあ、お前の声は基本的には誰にも聞こえない、と」

「そういうことだ」

歩を進ませながら、このスターダストがソリット・ヴィジョンではなく本物として見えるということに慣れてきた俺は彼と話していた。

話によればデュエルモンスターの精霊ということらしい。そういうものが見える人はそうそういない。見える原因はそういうたデュエルモンスターズに何かしらの大きな影響を受けること、らしい。らしい、といのも俺に何が起きたのかが分からない。昨日のことをしっかり覚えていたら何とかなっただろうが……。それに彼ももう1体の精霊も昨日は俺の近くにいなかったから分からない、とのこと。というか、俺には精霊がもう1体いるのかよ、と突っ込みたくなっただが気にしない。精霊が見えるとか、アニメでもあったな。

そうそう。この世界では遊戯王は超有名なカードゲームだ。それはプロデュエリストがいる程に。そのため、みんなデュエルのは知っている。

「精霊が見えるなんて夢のようだ」

「夢じゃない。現実にごういうことはあるのだ」

「分かってるよ」

実際に、俺の目の前にあるのは本当のことだ。夢だとは思わない。

「次いで言うておくが、私は女だぞ」

「マジ……で？」

「マジだ」

俺は驚愕の事実を今ここに突きつけられた。

「なん……だと……」

俺は奈落の落とし穴の底に叩きつけられたようだった。別に、地獄でも絶望的でもないのだがその様な感じがした。

TURNS 〽**精霊 現るー**〽 (後書き)

スターダストの性別は批判があると思います。反論はいいですが、
変えるつもりはさらさらないです。

では、感想やアドバイスをよろしくお願いします！

TURN 5 く龍一の友達く (前書き)

今回もデュエルなしです。では、さっす。

TURN 5 龍一の友達

「おはよー、みんな」

スターダストが女性だという驚愕の事実から10分、家から歩いて約30分程した所の高校に着き、教室に入った。スターダストはというと現在は物凄く小さくなって俺の肩に乗っている。

「おーっす、龍一！」

「相変わらずおせえなあ、お前は！」

「そうか？ いつも通りだと思っただが」

俺の挨拶に眼鏡をかけた黒の長髪の男と、少し赤みがかつた髪の男が声を返す。眼鏡をかけたほうは黒木優くろぎ すぐる、赤髪のほうは速水翔はやみ かけるという。

「おはよう、龍一！」

「のわっ!?!」

バックを席に下ろし、コートを脱ごうと思った矢先、後ろから抱きつかれた。バランス崩しそうになったが、何とか保った。こんなスキップするのは俺の知る限り一人しかいない。

「やっばお前か、悠奈」

「エへへ、やっぱり龍一はあつたかい」

俺に抱きついている青髪ショートカットの快活そうな女子は響悠奈ひびき ゆうなだ。因みに、これはこいつなりのスキンシップ兼湯たんぽということだ。スターダストは現在、俺の頭に逃げている。当初は驚いたが今はもう慣れた。そして俺達は付き合ってるわけではない。そこ、勘違いするなよ？ 背中に感じる柔らかな感触はどうなんだ、て？ そんなもの味わうことより暑くてコートを脱ぎたい。それに、そんなことを堪能しようだなんて全く考えてないからな！

「おはよ、龍一」

「おう、おはよう、葵」

最後に俺に声をかけて近づいてきた栗色の腰まであるロングヘアの女子は篠宮葵しのみや あおい。可愛いというより綺麗とか、美しいというほうが似合う少女だ。出会ったばかりはかなり冷たい態度を向けられてたけど。今でもそういうことがあるが、時々見せる笑顔はホント可愛いと思える。

因みに、この女子二人は校内で結構モテるほうでよく告白されている。然し、二人は全部蹴っている。

そうそう。この4人も遊戯王をやっている（当たり前なんだが）、優は光と闇を使ったカオステッキ、翔はドラグニティ、悠奈は魔法使い族、葵は代行天使を使っている。

俺達は基本、この5人で行動している。みんなの仲は非常にいいほうだと思う。

俺達は会話していると程なくして担任の先生が来て朝のHRホームルームが始まる時間になった。

* * *

「みんなちゃんというわね。それじゃ、今日は転校生を紹介するよ」
先生がクラスの出席を確認すると俺達にそう報告した。それを聞いてクラスは少しざわめく。

「転校生？」

「誰なんだろう？」

「格好いい男の子かな？」

「いや、可愛い女の子だ！」

まわりが色々と話し出す。どうでもいいが静かにしろ。

「静かに！」

先生がそう言うつと周りも静かになる。

「じゃあ、入ってきて」

静かになると、先生がそう言って前のドアが開く。そこから、肩につくくらの黒い髪の女子がいた。

「今日からこの学校に転入してきた倉木奈々（くらき なな）さん

です」

「倉木奈々です。皆さん、よろしく申し上げます」

「質問とかあるだろうけど、後で各自でしてね。倉木さんの席は響きさんの隣が空いているのでそこを使ってね」

「はい」

「それじゃあ、これから始業式だから体育館に行きましょう」

先生がそう言ってHRが終わる。面倒だが行くしかないんだよな、体育館に。

* * *

始業式と連絡事項が終わって学校が終わり、俺達は教室の一角に集まっていた。

「悠奈、お前が連れてきたのは……」

「そう、転校生の奈々だよ。これから昼飯食べに行くでしょ？ 奈々も一緒にいいかな、と思って」

「皆さんが迷惑じゃなければいいんですが……」

「全然大丈夫だよ！」

「寧ろ俺達のグループに入らない？」

「グループ？」

「うん。デュエルが大好き、てさっき言ってたからどうかな？」

「盗み聞きか？ 悠奈」

「そっじゃないから！」

「あ、じゃあよろしくお願いします」

「おう。「ちら」「そよろしく！」

「俺達の間じゃあそんな固くなんなくていいぜ」

そんなこんなで俺達のグループにメンバーが追加されたのだった。

TURN 5 く龍一の友達く（後書き）

最後の最後に会話ばかりになったような気がする……。

では、感想やアドバイスのほうをお願いします。

あと、どなたかは知りませんがお気に入りに登録してくれてありがとうございます！引き続き読んでいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862z/>

遊戯王 ~とある高校生の日常的で非日常的な生活~

2011年12月29日15時48分発行